

呉錦堂を語る会通信

NO.22 Sep. 2015

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2015.9.15



「呉錦堂は籠池通りの新邸に住んだか？」

呉錦堂の自宅あるいは別荘といえば、先ず名があがるのは舞子の移情閣です。地元では、“六角堂”と呼ばれ親しまれてきました。更に、呉錦堂のことを少し深く知っている人なら、籠池通りの自宅（右の写真。竹中工務店提供）を答えるでしょう。ところで、舞子の松海別荘の本館、付属棟、および移情閣については、既に学術的な調査・研究がなされ、発表されております。他方、籠池の家については、建物が現存しないことによるのでしょうか、ほとんど記述がありません。「呉錦堂を語る会」では、会員の活動として、少しでも情報を集めようと、調べてみました。間違い、不十分な箇所等も多いかと思えます。ご指摘、ご叱正いただければ幸いです。（編集委員 橋雄三）



《1. 呉錦堂による籠池通りの土地所有》

呉錦堂の土地所有については、当通信の前号で述べました。明治37（1904）年11月25日に帰化を許可され、最初に土地を所有したのが、明治37年12月16日の「神戸市栄町通1丁目17番」でした。次に、明治38年7月24日、舞子の「明石郡垂水村山田2028ノ3」の土地を、続いて、明治39年9月18日、「籠池通5丁目10番の1」の土地を取得しています。この「籠池通」の土地の所有権は、大正14年4月25日、呉錦堂合資会社へ、更に、昭和24年1月24日、天主教大阪教区へ移転しています。この土地に教会の名残があったのは、私の記憶にもあります。

《2. 「呉錦堂邸」の竹中工務店データ》

上の写真の家について、呉錦堂の孫、呉伯瑄氏から、竹中工務店が施工したと聞いていたので、まず、同社へ問い合わせました。メール、電話、面会の結果、次のことがわかりました。

1. 建物名称：呉錦堂邸（呉啓藩邸）
2. 建築主・所有者：呉錦堂
3. 建築地：神戸市籠池通5-1-1
4. 工期：昭和3年10月22日～昭和5年6月30日
5. 構造：鉄筋コンクリート造、木造、3階建
6. 延床面積：1045㎡

竹中工務店からデータを貰って、いくつか疑問が生じました。一番気になったのは工期です。呉錦堂は、1926年の1月14日に死去しますが、1926年1月16日付け神戸新聞の記事、「旧臘舞子の別邸から神戸市籠池通6丁目の新邸に引移って間もなく…」をどう読めばいいのでしょうか。同記事では「新邸」は1925年中に出来上がっているのです。竹中データの「籠池通5-1-1」と新聞記事の「籠池通6丁目」の違いも気になります。しかし、隣り合わせの地番に、5年をおかず、「新邸」が次々できたのでしょうか。竹中データでは、写真の「新邸」は呉錦堂死去の後、4年半もして完成しています。神戸新聞記事では、一ヶ月足らずですが「新邸」で過ごしたことになります。難問です。

工務店からいただいたデータの中に『店報』「祭式事」のコピーがあり、10月22日神戸呉錦堂氏邸地鎮祭に並んで、10月21日京都華頂会館竣工開館式、11月5日六甲山ホテル地鎮祭、11月5日三井銀行大阪西支店旧館（増築）竣工とありました。後の三つについても調べたのですが、いずれも、昭和3（1928）年の式事で矛盾はありませんでした。

竹中データ以外の情報がほしいところです。疑問はペンディングとしておきます。

籠池通五丁目。この辺りに呉錦堂邸があった。正面はサンマル



《3. 呉伯瑄氏、「呉錦堂邸」の思い出》

呉錦堂の孫、呉伯瑄氏は、籠池通りの「呉錦堂邸」について、次のように回想されています。以下、氏の承諾を得て掲載します。※は編集委員の補足です。

□「建築に30万円かかったと聞いています。竹中工務店の話では、竹中が施工した中では、神戸で一番立派だったそうです」

※昭和はじめの30万円は、今の5、6億円するのでしょうか。（日本銀行 Web site の物価指数を参照）

□敷地の中、建物の裏手に、コックら使用人の家が4、5軒建っていました。

□「1936年、父、啓藩の葬儀は、籠池の家で行なわれました。葬儀の様子は良く覚えています。前の道路から坂道も葬列が続きました」

□「私は、神戸大付属明石小学校、明石中学と舞子の家から通っていました。そして、土曜と日曜、籠池の家へ行っていました」

□「戦時中、海軍の溜まり場になっていました」

□「終戦の年の6月5日、神戸大空襲で全焼しました。わずか、ガレージだけが残りました」

※厳密に言うとガレージのほか、更に、庭木のヒマラヤ杉と道路沿いの塀も一部、残ったようです。

□「このヒマラヤ杉は上海の家から持ってきたものです。」

※それから80数年、庭木は大木に成長し、現在も、サンマルクの庭で、建築当時を知る唯一の生き証人として健在です。



サンマルクの庭に立つヒマラヤ杉

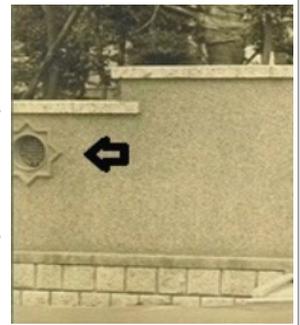


□「この大木の処置について、以前、サンマルクの責任者から私のところに電話がありました。それで、私は、『この木は商売繁盛の木ですから、切ったらダメですよ！』と答えておきました。すぐに切られることはないでしょう」

※と言いながらも、伯瑄さんは不安気だった。在り

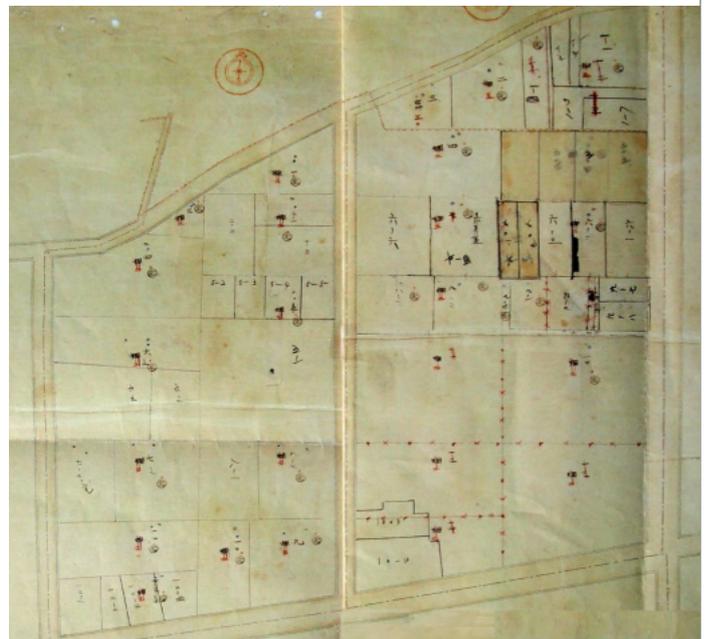
し日の「呉錦堂邸」の思い出を今に留めるこの木だけは、いつまでも元気でいてほしいのでしょうか。

□「塀の飾りの部分（右写真、矢印の部分）を、壊れてはいませんが今も保管しています」（呉夫人のことば）



《4. 伯瑄氏が語る、もう一つの呉錦堂邸》

下の図面は、法務局で交付を受けた籠池通りの古い図面です。図面の一番下、東西の道路は山麓線（通称：野崎通）です。山麓線より北で、この図面中央、南北に走っている道路の東が籠池通5丁目、西が6丁目です。5丁目部分の下半分が呉錦堂の所有地で、この部分に「呉錦堂邸」がありました。



ところで、「呉錦堂邸」の道路を隔てた西、すなわち、6丁目部分にも呉錦堂の所有地はありました。これについても土地台帳で確認しております。伯瑄氏の話では、この6丁目部分にもかなりの邸宅があって、フランス人に貸していたとおっしゃっています。また、籠池通5丁目の土地取得は、上述の通り、明治39年です。この土地取得以後、“普請道楽”といわれる呉錦堂が、写真の「呉錦堂邸」の建築まで家を建てなかったとは考えられません。それなりの邸宅を建てていたでしょう。

こうなると、話が錯綜し、呉錦堂臨終の家、蒋介石が有馬への往還に立ち寄った「呉啓藩邸」、フランス人に貸していた家、当紙面トップに掲げた写真の「呉錦堂邸」、これらがどのように結びつくのか、結びつかないのか、現段階では情報不足です。

大人物小故事 (18)

我的外公吳錦堂

曹愛德著

开 荒

外公在日本成为富豪后，年年不忘报效祖国和家乡人民。同时外公在日本生活了几十年，人非草木，再说自己又来自农村，心里特别懂得怜恤贫寒和穷苦的人。当时日本神户附近郊区农村，有一个名“小束野”村，每年不是五谷茂盛，由于自然条件差，常常受灾，使这里的许多农民无家可归，无田可耕，外公就像对自己的家乡一样，出资请人在“小束野”的山上建造水库，蓄水和开垦荒地一百多亩，他还亲自上山考察，选择土壤，合适的山地，同时指导要开挖多深，之后又建造一排排的平屋。然后请无地的农民上山安家落户，那些的走投无路的农民仿佛重见天日，喜人眉梢！从此旱涝无虑，免受饥饿。朴实勤劳的日本农民齐心协力日复一日，年复一年在荒地上耕耘。当看到绿油油的庄稼时，心里乐开了花。有了收成，他们又发展生产，兼养家畜，渐渐脱离了贫穷，劳力多的还自己盖了房子，过上了好日子。为了不忘外公的厚爱和纪念外公的恩惠，日本农民把原来的“小束野”村改名为“吴锦堂”村，又在村口竖起了“吴锦堂显章碑”一块！

当时日本其它地区也经常发生水灾，让众多的日本农民受饥挨饿，流离失所。我外公依然扶贫，悉力赈济，由于外公的连续善举使日本天皇深受感动，特此给外公赠银杯和嘉奖。



【受天皇嘉奖时留影】

開 墾

祖父は、日本で大金持ちになった後、いつも、祖国とふるさとの人々のために尽力することを忘れませんでした。同時に、祖父は日本で数十年生活し、人は木石ではなく感情があり、まわりの事柄に心を動かされやすいといいますが、自身、農村出身であったから、貧しい人への同情心が厚く、その苦しみがかかっていました。当時、日本の神戸近郊の農村に“小束野”という村がありました。この村は、毎年、五穀の実りは劣り、自然条件が悪く、いつも、災害を受け、この村の多くの農民は帰る家がなく耕す田がなかったため、祖父は、自分の故郷同様に、お金を出して人を招き、“小束野”の山上に池を造って水をため、百ム一余（約65町）の荒地を開墾し、また、自身、実地調査をし、土壌を選び、土地を選び、同時に、深く掘ることの必要を指導し、そのあと、一並びの平屋を建てました。その後、土地のない農民を開墾地に招き、家を持たせて定住させ、また、行き場をなくした農民は、まるで、暗いところを抜け出して、再び光明にめぐり合ったように、喜びに目を輝かせました！これから、干ばつも水害も心配しなくてよくなり、飢餓を免れました。質素勤勉な日本の農民が心をひとつにして、来る日も来る日も、一年また一年、荒地を耕しました。緑豊かな農作物を見たとき、心に楽しく花が咲きました。収穫をして、農民たちは、また、生産を拡大させ、家畜を養い、次第に貧窮を脱し、労働力のある家は、家を建て、よい暮らしができるようになりました。祖父の深い愛を忘れないため、また、祖父の恩恵を記念して、農民たちは、“小束野”村を“吳錦堂”村と改名し、村の入り口に“吳錦堂顕彰碑”を立てました。

当時、日本のそのほかの地区は、頻繁に水害が発生し、多くの農民が飢餓に苦しみ、路頭に迷っていました。祖父は、変わらず、救貧に全力を尽くしたので、祖父の幾度も社会事業は日本の天皇を感動させ、祖父に銀杯と褒賞が贈られました。

（“才女”4ページから続く）

事与凑巧，这位老师就是当年那对盲人夫妇的女儿，名字叫“沈明秀”。由于她多年的埋头苦学，除了上课外就钻进了图书馆，稍有空闲就练习书写，终于成了外公心目中的才女，后来为锦堂学校培养了一代又一代的有用人才。

外公一生为祖国和家乡人民做了许多的好事，家乡人民永远不会忘怀。2009年学校校庆一百周年，为纪念吴锦堂先生的丰功伟绩，校友茅理翔出资在外公创办的学校高高竖立起加大型的铜像，愿外公的精神发扬光大，与世长存！

偶然、この教師は、あの時の目の不自由な夫婦の娘で、名を“沈明秀”といいました。彼女は、長年の専心苦学、授業時間以外は、図書館に行き、少し時間があると字を書く練習をし、ついに、祖父の心に留まる才女となり、その後、錦堂学校のため、一代、また一代と有用な人材を養成しました。祖父の一生は、祖国とふるさとの人々のため多くの社会事業をなし、ふるさとの人々は永遠に忘れることはありません。2009年、学校創立百周年記念のとき、吳錦堂先生の偉大な業績を記念し、卒業生の茅理翔が出資して、祖父の創った学校に、高々と祖父の大型銅像を立て、吳錦堂精神の一層の発揚、長存を願いました！

大人物小故事 (19)

我的外公吴锦堂

曹愛徳著

“才女”

一个晴朗的早晨，一群身穿粗布衣，脚穿草绳鞋，肩挑简单的行李铺盖的学生们，兴高采烈的行走在乡间的小路上。离他们的不远处有一对盲人夫妇，俩人扛着一斗粮食，手拉着一个瘦小机灵的女儿，跟着学生们的脚踪移步，原来今天是外公创办的学校第一天开学，校门口锣鼓喧天，彩旗飘飘，一派喜气洋洋，我外公当年曾经说：“近世列国争强，要在世界上立足，教养二事很重要，国民失养，就无以为生，国民失教，就难以争生存。”他认为：“日本富强，全靠教育”。所以学校办学的方针，课程的设置，教学方法，包括教学的仪器，课本及图书馆的书本都是从日本引进的。为了教育质量，外公想方设法提高师资水平，外公创办的学校，面积之大，规模宏伟，师资之充足，校具之精良，是国内私人学校的佼佼者。校舍的建筑完全仿造日本的模式，更可贵可喜的是学校向广大劳苦百姓敞开，不但学费减免，还赠送学习用品，“如书籍，文具等”。成绩优秀的还发奖学金，中午免费提供午餐，家庭特殊困难的读一天书还可以领到一担柴钱。捐学，助学考虑的如此周到，让人简直无法相信。原本那盲人夫妇扛的粮食就是来交学费的，经过老师再三的介绍，他们才恍然大悟，心里又高兴又激动，拉着老师的手连声道谢，并轻轻的说：“天底下竟有这么好的大好人”。回头对女儿“明秀”说：“你一定要刻苦读书，将来报答恩人”！

事隔多年，有一次学校里外公的铜像落成典礼上，不少受到外公恩惠的社会团体，个人，包括锦堂的老师 and 校友都先后要送上一篇“匾文”，要求用毛笔写在绢上。而且不宜长，但要表达对母校创办人的真实情感！之后，这些“匾文”传到了日本，外公一一细阅发现其中有一篇文字清秀的“匾文”，让外公爱不释手。于是外公很快发信到家乡，打听这个老师在哪里，并且让锦堂学校聘她去任国语教员。



“才女”

晴れわたったある朝、質素な木綿の服を着て、草履を履き、肩に簡単な荷物と布団を担いだ一群の学生が、喜びにあふれ、村の小道を通って行きます。学生たちからそう遠くないところを一組の目の不自由な夫婦がついていきます。この夫婦は、穀物を担ぎ、一人の痩せた小さな利巧そうな娘の手を引いています。なんと、この日は、祖父が創立した学校の開学の日なのです。校門のところでは、ドラや太鼓の音が空まで響き、色とりどりの旗がはためき、喜びにあふれていました。祖父は、当時、かつて、「列国が覇を争う今の時代、世界に立脚地を作ることが必要で、そのためには、教育と養育、この二つのことが非常に重要です。つまり、国民が養育を失うと生きていけず、国民が教育を失うと、列国と生存をかけて争うことが難しい」と言いました。祖父は、「日本の富強は全て、教育による」と思っています。それで、学校の教育方針、教育課程の設置、教授法、それに、教育機器、テキスト及び図書館の書籍まで含めて、全て、日本から導入しました。教育の質を維持するため、祖父は、八方手を尽くして教員のレベルを高め、また、祖父が創った学校は、面積が広く、規模が壮大で、教師の充足、工具の精良、全て、中国国内の私立学校の先駆者となりました。校舎の建築は完全に日本に倣い、称賛されるべきは、学校を広く勤労大衆に開放し、学費の減免だけでなく、“例えば、書籍、文具など”学用品まで贈りました。成績優秀者には、また、奨学金を出し、昼食も無料で提供し、家庭が特別困難な学生が一日勉強すると一担ぎの柴に相当するお金を受け取ることができました。学習支援への配慮はこのように行き届いたもので、まったく、信じられないほどでした。上述のあの目の不自由な夫婦が担いでいた穀物は学費として納めるもので、先生の再三の説明を経て、夫婦はやっと、はっと悟り、喜び、また、感動して、先生の手を取り、何度も礼をいい、そっと、「世の中に、こんないい人が居ようとは」と言いました。娘の“明秀”の方を振り返り、「お前は、必ず、骨身を惜しまず勉強して、将来、恩人に報いるのですよ」と言いました。

年月が経って、学校で祖父の銅像の落成式があり、式では、祖父から多くの恩恵を受けた社会団体、個人、それから、錦堂学校の教師と卒業生を含め、みんな相次いで、絹布に毛筆で、一言ずつ寄せ書きをしました。長い文章はだめで、その上、母校の創業者に対する本当の気持ちを表現することが求められました。その後、これら“寄せ書き”は日本に届けられました。祖父は寄せ書きに書かれた多くの文章を綿密に読み、その中に、一つの文字麗しい文章を見つけ、祖父は、手放すに忍びませんでした。それで、祖父は、すぐに、ふるさとに手紙を書き、その教師はどこにいるかと問い合わせ、且つまた、錦堂学校に、彼女を国語教員として招聘させました。